

第2節

商品売買取引の仕訳

1 商品売買とは

商品売買とは、商品を仕入れる(買う)取引と、その商品を販売する(売る)取引をいいます。商品売買を仕訳する方法には、ぶんきほう分記法、そうきほう総記法、さんぶんかつほう三分割法などがあります。

◆ どういう仕訳をするのか ◆

実務では、三分割法で商品売買の仕訳をしている会社が多いのですが、三分割法を理解するためには分記法から学んだほうが理解しやすいので、ここでは、分記法と三分割法について解説します。

(1) 分記法

分記法は、商品売買取引を^{しょうひん}商品と^{しょうひんはんばいえき}商品販売益という2つの勘定科目を使って仕訳する方法です。商品は資産の勘定科目、商品販売益は収益の勘定科目です。

商品を仕入れたときは、商品が増加するので商品勘定を借方に、商品を販売したときは、商品が減少するので商品勘定を貸方に仕訳します。

会社は、商品を販売するときに、仕入れた金額に利益を上乗せして販売します。この利益部分については、販売したときに商品販売益勘定を貸方に仕訳します。

このことを前提に、スポーツ用品販売会社A社の次の取引を仕訳してみましょう。

A社は、野球のグローブを現金 20,000 円で仕入れました。そして、これを 30,000 円で販売し、代金は現金で受け取りました。

仕入時：(借方) 商 品	20,000	(貸方) 現 金	20,000
--------------	--------	----------	--------

◀資産の増加 (左)

資産の減少 (右) ▶

販売時：(借方) 現金	30,000	(貸方) 商品	20,000
		商品販売益	10,000
◀資産の増加(左)		資産の減少・収益の発生(右)▶	

(2) 三分割法

分記法では、商品を販売するたびに商品の仕入金額を調べて仕訳する必要があるのですが、取り扱う商品の種類や量が多いととても面倒です。このような場合には、三分割法という方法が適しています。実務では、一般に三分割法によって処理します。

三分割法は、商品売買取引を繰越商品くりこししょうひん、仕入しいれ、売上うりあげという3つの勘定科目を使って仕訳する方法です。繰越商品は資産の勘定科目、仕入は費用の勘定科目、売上は収益の勘定科目です。

商品を仕入れたときには、商品という資産が増加したと考えるのではなく、仕入という費用が発生したと考え、仕入金額を仕入勘定として借方に仕訳します。そして、商品を販売したときには、上乗せした利益も含めた売上金額すべてを売上勘定として貸方に仕訳します。

このことを前提に、32ページの取引を三分割法で仕訳してみましょう。

仕入時：(借方) 仕入	20,000	(貸方) 現金	20,000
◀費用の発生(左)		資産の減少(右)▶	
販売時：(借方) 現金	30,000	(貸方) 売上	30,000
◀資産の増加(左)		収益の発生(右)▶	

このように、仕入勘定には仕入原価げんか(原価)で、売上勘定には販売価額ばいか(売価)で記録されるので、差額が商品販売益(利益)として把握できることとなります。この利益の算定方法と繰越商品勘定については、第4章第2節で解説します。



第2章
各種取引の仕訳

2 掛とは

会社は、いろいろな相手と1日に何回も商品売買取引を行います。商品や数量によっては、1回の取引金額が大きくなることもあります。また、同じ会社と毎日のように取引をすることも多いものです。このような場合に、商品売買のたびに現金で決済するのでは、持ち運びの手間やリスク、事務コストがかかってしまいます。

そこで、「必ず回収できる」「必ず支払う」とお互いに信用している会社同士では、後日に代金をまとめて受け渡す約束で、商品を売買することがあります。このような取引を^{かけとりひき}掛取引といいます。一般にいう“ツケ”と同じイメージです。

売り手が商品を^{かけ}掛で販売したときには、^{うりかけきん}売掛金という債権が発生します。反対に、買い手が商品を^{かいかけきん}掛で仕入れたときには、^{かいかけきん}買掛金という債務が発生します。

◆ どういう仕訳をするのか ◆

売掛金は資産の勘定科目、買掛金は負債の勘定科目です。

掛で商品を販売したときは、代金を後日に受け取る権利を示す^{●●}売掛金が増加するので売掛金勘定を借方に仕訳します。そして、約束の日に掛としていた代金を受け取ったときは、売掛金が減少するので売掛金勘定を貸方に仕訳します。

掛で商品を仕入れたときは、代金を後日に支払う義務を示す^{●●}買掛金が増加するので買掛金勘定を貸方に仕訳します。そして、約束の日に掛としていた代金を支払ったときは、買掛金が減少するので買掛金勘定を借方に仕訳します。

(1) 掛で商品を売買したときの仕訳

このことを前提に、スポーツ用品販売会社A社の次の取引を仕訳してみましょう。

A社は、1枚2,000円のTシャツ20枚と、1枚1,500円のTシャツ30枚を掛で仕入れました。そして、このTシャツ50枚を1枚当たり3,000円でC社野球部に販売し、代金は月末に受け取ることとしました。

仕入金額は、85,000円(= 2,000円×20枚+1,500円×30枚)になります。

仕入時：(借方) 仕 入	85,000	(貸方) 買掛金	85,000
--------------	--------	----------	--------

◀費用の発生(左)

負債の増加(右) ▶

売上金額は、150,000円(= 3,000円×50枚)になります。

販売時：(借方) 売掛金	150,000	(貸方) 売上	150,000
◀資産の増加(左)		収益の発生(右)▶	

(2) 掛代金を決済したときの仕訳

掛取引では、約束の期日に買掛金を支払う、または売掛金を回収します。A社の次の取引を仕訳してみましょう。

C社野球部からTシャツの販売代金150,000円が普通預金口座に振り込まれました。その翌日、A社は掛で仕入れたTシャツの代金85,000円について、仕入先に小切手を振り出しました。

売掛金を回収したときは、売掛金という資産が減少するので売掛金勘定を貸方に仕訳します。

回収時：(借方) 普通預金	150,000	(貸方) 売掛金	150,000
◀資産の増加(左)		資産の減少(右)▶	

買掛金を支払ったときは、買掛金という負債が減少するので買掛金勘定を借方に仕訳します。

支払時：(借方) 買掛金	85,000	(貸方) 当座預金	85,000
◀負債の減少(左)		資産の減少(右)▶	



3 値引、返品とは

売買した商品にキズや汚れがあったり、数量が足りなかったりしたために、通常よりも代金を安くすることを値引といひます。商品の売り手が値引を行った場合には、売上商品について値引をするので売上値引ともいい、商品の買い手が値引を受けた場合には、仕入商品について値引を受けるので仕入値引ともいひます。

また、売買した商品にキズや汚れがあったり、サイズや品違ひがあったりしたために、その商品を返すことを返品といひます。商品の売り手が返品を受けた場合には、売上商品が戻ってくることになるので売上戻りともいい、商品の買い手が返品した場合には、仕入商品を戻すことになるので仕入戻りともいひます。

◆ どういう仕訳をするのか ◆

売り手が値引を行った場合、その取引の相手である買い手は値引を受けることになりまひ。値引は、売買代金を安くすることなので、売り手は売上金額が減り、買い手は仕入金額が減ることになりまひ。

同様に、買い手が返品を行った場合、その取引の相手である売り手は返品を受けることになりまひ。返品は、売り手にとっては売上が取り消されることであり、買い手にとっては仕入を取り消すことまひ。

このことを前提に、スポーツ用品販売会社A社と自転車製造会社D社の次の取引を仕訳してみまひ。

D社は、1台30,000円の自転車10台をA社に掛で販売まひ。ところが、そのうちの1台にキズがあったため、3,000円の値引を行い、掛代金から差し引くことまひ。また、もう1台の自転車は、品違ひにより返品まひ。

(1) 売り手(D社)の仕訳

売上は収益の勘定科目なので、売上が発生したときは貸方に、消滅したときは借方に仕訳まひ。

売り上げた商品について値引をしたときは、その値引分だけ売上を取り消すと考え、売上勘定を借方に仕訳まひ。今回は掛で販売まひるので、相手勘定は売掛金(資産)になりまひ。

値引時：(借方) 売 上	3,000	(貸方) 売掛金	3,000
--------------	-------	----------	-------

◀収益の消滅 (左)

資産の減少 (右) ▶

いったん売り上げた商品の返品を受けたときは、値引と同様、売上を取り消すために売上勘定を借方に仕訳します。

返品時：(借方) 売 上	30,000	(貸方) 売掛金	30,000
--------------	--------	----------	--------

◀収益の消滅 (左)

資産の減少 (右) ▶

(2) 買い手(A社)の仕訳

仕入は費用の勘定科目なので、仕入が発生したときは借方に、消滅したときは貸方に仕訳をします。

仕入れた商品について値引を受けたときは、値引してもらった分だけ仕入を取り消すと考えて、仕入勘定を貸方に仕訳します。今回は掛で仕入れているので、相手勘定は買掛金(負債)になります。

値引時：(借方) 買掛金	3,000	(貸方) 仕 入	3,000
--------------	-------	----------	-------

◀負債の減少 (左)

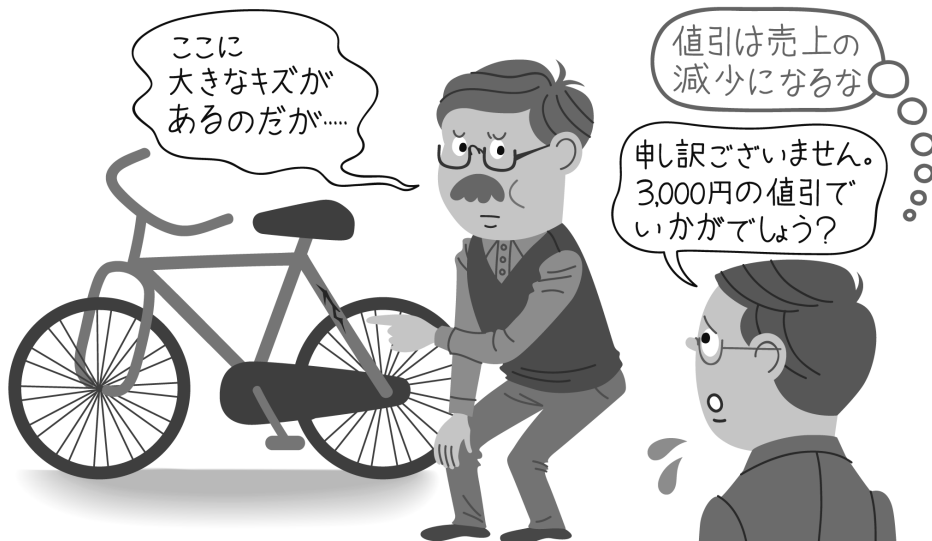
費用の消滅 (右) ▶

仕入れた商品を返品したときは、値引と同様、仕入を取り消すために仕入勘定を貸方に仕訳します。

返品時：(借方) 買掛金	30,000	(貸方) 仕 入	30,000
--------------	--------	----------	--------

◀負債の減少 (左)

費用の消滅 (右) ▶



4 割引とは

値引や返品とよく似た言葉に、**割引**^{わりびき}というものがあります。割引とは、掛代金を期日前の一定期間内に現金で決済した場合に、早まった期間についての金利相当分をその掛代金から減額することです。約束の期日より早く売掛金を回収した売り手が、売掛金の支払いの一部を免除することを、**売上割引**^{うりあげわりびき}といます。

売り手が売上割引を行った場合、その取引の相手である買い手では、**仕入割引**^{しいれわりびき}が発生します。すなわち、仕入割引は、買い手が約束の期日より早く買掛金を支払ったことにより、買掛金の支払いの一部が免除されることをいいます。

◆ どういう仕訳をするのか ◆

割引は、値引や返品と違って商品そのものには理由がありません。掛代金が期日前に決済されたことによる金利相当分を差し引くというものです。したがって、売上や仕入の取消ではなく、**利息に近いもの**として仕訳をします。

このことを前提に、スポーツ用品販売会社A社と自転車製造会社D社の次の取引を仕訳してみましょう。

D社は、先日、スポーツ用品販売会社のA社に掛で販売した自転車の代金267,000円が約束の期日より10日早く支払われたので2,000円の割引をし、残りの金額を小切手で受け取りました。

(1) 売掛金の一部を免除した側(D社)の仕訳

小切手を受け取ったときは、現金勘定で仕訳をしました。現金と売掛金は、いずれも資産の勘定科目なので、増加したときは借方に、減少したときは貸方に仕訳します。また、売上割引は費用の勘定科目なので、割引をしたときは借方に仕訳します。

したがって、貸方には売掛金267,000円が、借方には免除した売掛金2,000円を売上割引勘定で、残りの265,000円が現金勘定で仕訳されます。

割引時：(借方) 現金	265,000	(貸方) 売掛金	267,000
売上割引	2,000		

◀資産の増加・費用の発生(左)

資産の減少(右) ▶

(2) 買掛金の一部の免除を受けた側(A社)の仕訳

小切手を振り出したときは、当座預金勘定で仕訳をしました。当座預金は資産の勘定科目なので、増加したときは借方に、減少したときは貸方に仕訳します。買掛金は負債の勘定科目なので、増加したときは貸方に、減少したときは借方に仕訳します。また、仕入割引は収益の勘定科目なので、割引を受けたときは貸方に仕訳します。

したがって、買掛金 267,000 円が借方に、買掛金のうち免除を受けた 2,000 円が仕入割引勘定で、残りの 265,000 円が当座預金勘定で貸方に仕訳されます。

割引時：(借方) 買掛金	267,000	(貸方) 当座預金	265,000
		仕入割引	2,000
◀負債の減少(左)		資産の減少・収益の発生(右)▶	

5 付随費用とは

商品を仕入れるときには、商品を運ぶための送料や、商品に掛けた保険料などの費用がかかります。このような費用を付随費用ふずいひようといい、商品代金とあわせて仕入勘定で仕訳します。

このことを前提に、スポーツ用品販売会社A社の次の取引を仕訳してみましょう。

A社は、1台 20,000 円の自転車を掛で仕入れ、引取運賃ひきとりうんちん 3,000 円は現金で支払いました。

仕入勘定は、商品代金と付随費用(引取運賃)の合計 23,000 円になります。

仕入時：(借方) 仕入	23,000	(貸方) 買掛金	20,000
		現金	3,000
◀費用の発生(左)		負債の増加・資産の減少(右)▶	